



セルクル：一九世紀のアソシアシオン

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 沢田, 善太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006329

セルクル——一九世紀のアソシアシオン

沢 田 善 太 郎

はじめに

今日の社会では、行政や経済活動はもとより、多くの社会運動や、時には文化・スポーツ活動までが、官僚制化した全国組織によって維持されている。しかし、一八世紀のイギリスのクラブや一九世紀のフランスのセルクル (circle) に見られるように、産業革命の前後の西欧社会では、比較的少数の自発的集団がアソシアシオン (association) のモデルになり、政治や経済の領域でも大きな役割を果たしていた。

本稿では、フランスの歴史家、モーリス・アギュロン (Aguillon, Maurice) の著作を素材に、一九世紀フランスのセルクルのもつ意味を論じる。アギュロンの研究はフランスのアソシアシオンの歴史について豊富な資料を提供してくれるだけでなく、分析の視点も斬新である。この小論ではソシアビリティ (sociability) という彼のアソシアシオン研究の鍵概念を利用し、主に彼の提供した材料を用いてセルクルを考察する。アギュロンの研究が、専門の研究者を除くと、わが国ではまだほとんど知られていない現状では、このような紹介的研究も満更無意味ではあるまい。

とはいえ、本稿がいかにかにアギュロンの恩恵をこうむっているにしても、筆者には筆者独自の問題関心がある。最初に従来の研究史の要約を兼ねて、この小論の問題意識をもう少し詳しく説明しておきたい。

近代アソシアシオンの定義

ギルドや教会、村落共同体など、諸個人がいわば運命的に帰属する伝統的な中間集団と異なり、近代アソシアシオンは、これらの集団が衰退するなかで原子化し、無力化した諸個人が社会的影響力を回復するために作り出す自発的集団である。

この定義は、トクヴィルやデュルケム^②によって定式化された後、多くの社会学者によって受け入れられながら、実際には突っ込んだ検討が加えられず、抽象的な図式にとどまっているのが現状ではあるまいか。伝統社会のなかから近代アソシアシオンが出現する過程を具体的に論じた社会学の研究は、ウェーバーやトレルチのプロテスタンティズムの教派に関する研究^③以外、筆者には思いあたらない。近代アソシアシオンの成立過程の歴史社会的な研究は、社会学のアソシアシオン研究の最も弱い分野の一つである。

アメリカのアソシアシオン研究

このことは、アソシアシオンの研究が、アメリカのアソシアシオンを主要な研究対象とし、主としてアメリカの社会学者の手で進められてきたことにもよる。アメリカのアソシアシオンの研究は、トクヴェール、ブライス、ウェーバーなど、旧世界の知識人が合衆国におけるアソシアシオンの隆盛を目撃し、それに触発されておこなった研究^①によってはじまり、アメリカの社会学者によって受け継がれた。これらの研究を通じて、多種多様なアソシアシオンの存在がアメリカ社会の特質とみなされるようになった。アメリカ社会は多様なアソシアシオンが存在することによって^②、 Δ システムとしての安定性 ∇ を維持しているという Δ 多元主義 ∇ のモデルが築かれ、このモデルにそった研究が、一九七〇年代までのアメリカのアソシアシオン研究の大部分を占めた^③。

アメリカはヨーロッパと比べ、伝統的共同体の桎梏が希薄な社会である。植民地時代以来、市民の自治の基盤となったタウンシップも近代の地域共同体である。この意味で、近代アソシアシオンの成立過程における Δ 伝統 ∇ と Δ 近代 ∇ との対立について研究しようとする、アメリカは必ずしも最適の社会ではない。非歴史的な機能分析がアソシアシオン研究の主流となったのは、アソシアシオン研究の主たる推進者であったアメリカ社会学の知的風土の反映であると同時に、研究対象設定におけるこの事情によることも大きいのではあるまいか。

トクヴェール以降、アメリカのアソシアシオンの研究に最も鋭い歴史的感觉を示したのはウェーバーの『プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神』である^④。しかし、プロテスタンティズムの近代性を強調する彼の図式は、カトリック教会が強い支配力を持ち、伝統的共同

体も強固であった西欧の諸地域における近代アソシアシオンの形成の問題を研究の視野の外に追いやる場合も少なくなかった。

多元主義理論の場合も、ウェーバーの影響を受けた近代化論の場合も、アメリカ産のアソシアシオン論は、伝統社会の内部で徐々に成熟する近代アソシアシオン成立の契機を見落とす危険がないだろうか。本稿がフランスのアソシアシオンを題材にするのは、カトリック教会と共同体の伝統の強固な旧世界における近代アソシアシオンの成立過程に注目したいからである。

フランスのアソシアシオン研究

以上、本稿がフランス社会を対象にアソシアシオンの研究をおこなう理由を説明した。従来、アメリカがアソシアシオンの繁栄によって特徴づけられるのと対照的に、フランスはアソシアシオンの伝統の弱い社会として特徴づけられることが多かった。この通念に疑問を挟む研究があらわれるようになったのは比較的最近のことである。

アーノルド・ローズ^⑤は、フランスのアソシアシオンが弱体であるという見解を最も系統的に展開した。彼は自分自身の観察と当時（一九五〇年前後）入手可能であった調査資料をもとに、フランスはアメリカに比べてアソシアシオンが数や種類、加入者などの点で少なく、社会的に果たす役割も小さいと主張した。ローズによると、これはフランスの歴史的な事情によるものである。i. 〇世紀初頭まで、フランスでは政府によるアソシアシオンの法的規制が存在した。ii. フランスの社会思想のなかにはアソシアシオンの国家統制を正当化する要素が含まれていた（「一般意志が表明されるためには、国家の内部に一切的部分的社会をなくすようにすべきである」というルソーの意見や、

「良く統治されている社会には、私的アソシアシオンの必要は全く存在しない」というヴォルテールの意見は、アソシアシオンの法的規制の理論的根拠の一つになった。⁸³ iii. フランスでは、教会、修道会やギルドが旧体制下で蓄積した死蔵財産が資本主義化の障害となった経験から、アソシアシオンの財産所有に厳格な規制がおこなわれた。また、iv. 慈善活動を平信徒より聖職者中心におこなうカトリック教会の伝統と、v. 他の諸国では自主的なアソシアシオンが引き受けるような諸活動まで行政主導型でおこなうフランスの強固な中央集権制度とは、いずれも福祉や社会活動を目的とするアソシアシオンの発達を妨げる要因になった。

ローズによると、近代社会におけるアソシアシオンの機能は、諸個人の「仲間」要求、「安全」要求、世界を支配する諸力を「理解」し、かつ、それを「統制」するという要求に込めることである。アソシアシオンの弱体なフランスではカフェ、政党、夫婦家族などが部分的にこれらの機能を代行している。しかし、これらの機能的代替項目は「仲間」要求には込めるが、「安全」、「説明」、「統制」の要求には込められていない。このことはフランスの社会的・政治的緊張の要因になっている。たとえば、アソシアシオンを抑圧するフランスでは政治的秘密結社が発達した。また、第二次世界大戦のナチ占領期間、フランスで抵抗運動を組織したのは、フランス国民のなかの少数ない有力アソシアシオンである共産党であり、それ以外の回路はほとんど切断された。

ローズの主張は多くの議論を呼んだ。ギャラゲやアンダーソン夫妻など、概して一九六〇年代までの調査研究はローズの主張を支持するものが多い。これに対して、一九七〇年代以後の研究には、フランス

におけるアソシアシオンの発達を強調し、ローズの議論に疑問を提出するものが多い。

結社法にもとづいて登録された新しいアソシアシオンは毎年着実に増加している。パラルの推定によると、約二五万の（公認）アソシアシオンが今日のフランスで活動している。一九六五年と七五年のアソシアシオンの届け出を比較したカントによると、住民生活や環境に結びついたアソシアシオンやスポーツ団体も確実に増加の傾向があるが、さらに著しく増加しているのは、健康の分野や社会運動の分野のアソシアシオンである。老人関係のアソシアシオンの発展も目立っていて、届け出数が七倍になっている。

地域調査もこのようなフランスのアソシアシオンの発展を報告する。ランファンは、モーゼル県の人口八万人の地方都市に約四百のアソシアシオンが非常に密度の高い活動をおこなっている実態を調査した。彼女によると、フランスではアソシアシオンが弱体であるというローズの主張は、彼が利用した一九五〇年当時の資料が、ナチスとヴィシー政権の下で既存のアソシアシオンが崩壊した後、まだアソシアシオンが復活途上にあつた時期のものであることの反映である。また、キャンがおこなったリムーの調査は、アソシアシオンの数や参加率については触れていないが、種々のタイプのアソシアシオンがこの地域の人々のアイデンティティの形成と分化に寄与している実態を論じている。

歴史学と社会学

フランスのアソシアシオンの現状からローズの主張を再検討する社会学者の動きと並行して、七〇年代には、歴史学者の間でも旧体制末

期から一九世紀にかけてのフランスのアソシアシオンの歴史を探究する試みがあらわれてきた。本稿で検討するアギュロンの諸著作はその先駆となった研究である。社会学の研究と歴史学の研究は扱う時期もちがうし、研究者の受けるトレーニングの内容もちがう。にもかかわらず、アソシアシオンの研究においては、両者に共通の視点も徐々に生まれつつあるようである。

本稿ではこの両者に共通する視点を重視して議論を進める。ランファンやキャバンの調査は、今日のフランスのアソシアシオンがより大きな社会制度と結びついて発達していることを示している。たとえば、大規模な官僚制組織が存在し、これを基盤として人々が交流している、そこには官僚制の枠組みを越えた多くの小集団が生まれ、アソシアシオンに発展するものである。彼らの調査では、このようなアソシアシオンの母胎となる制度として、教会、市当局 (municipalité)、地域の大企業や総合病院などが見いだされた。このように、アソシアシオンがより大きな社会制度を基盤にして発達するという視点は、アギュロンの研究でも強調されている。彼はこの視点からのアソシアシオン研究のために、ソシアビリティという概念を用いた。以下、章を改めて、アギュロンのソシアビリティの概念と、この概念にもとづくアソシアシオン研究の方法を論じたい。それは単に歴史学者だけでなく、社会学者にも利用できるものである。

注

(1) 本稿で引用するアギュロンの著作は次の五つである。

Aguhon, Maurice, 1968, *Penitents et franc-maçons de l'ancienne Provence: essai sur la sociabilité méridionale*, Paris, Artheme Fayard.

nouvelle édition, 1984

—, 1970, *La République au village*, Paris, Plon.

—, 1971, "Les charnières en Basse-Provence: histoire et ethnologie", *Revue historique*, 498, avr.-juin, pp. 337-368.

—, 1977, *Le Cercle dans la France bourgeoise, 1810-1848: Etude D'une mutation de sociabilité*, Paris, A. Colin, 1977

Aguhon, M., et Bodiguel M., *Les Associations au village*, Paris, ACTES SUD, 1981

(2)

A・トクウィル、井伊玄太郎訳「アメリカの民主政治」講談社(三分冊)一九八七年。Tocqueville, Alexis de, *De la démocratie en Amérique*, 1835-40

E・デュルケーム、宮島喬訳「自殺論」講談社、一九八五年 Durkheim, Emile, 1897, *La Suicide: Etude de sociologie*

E・デュルケーム、田原音和訳「職業集団化にかんする若干の考察」『社会分業論』第二版序文 青木書店、一九七一年) Durkheim, Emile, 1902,

"Quelques remarques sur les groupements professionnels", *Seconde préface adjointe a la II^e édition de De la division du travail sociale*.

(3)

M・ウェーバー、中村貞二訳「プロテスタントイスマの教派と資本主義の精神」『ウェーバー宗教・社会論集』(世界の大思想II—河出書房新社、一九六八年所収 Weber Max, *Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus*, 1914. および「マニフエスチアン」第七—第九巻(ロンドン)社所収の諸論文参照のこと。

(4)

トクウィル前掲書。注(2)参照。
Bryce, James, 1893, *The American Commonwealth*, (New York, Macmillan, 1910).

ウェーバー前掲書。注(3)参照。

(5)

この時期の研究については Constance Smith & Anne Freedman, 1972, *Voluntary Associations: Perspectives on the Literature*, Cambridge, Massachusetts, Harvard Univ. Press. 参考文献にも参照。

- (6) 注(2)参照。
- (7) Rose, Arnold, 1954, 'Voluntary Associations in France' in *Theory and Method in the Social Sciences*, Minneapolis, Minnesota Univ. Press.
- (8) ルソー、森原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』岩波文庫一九八六年、四七—四八頁。および Rose, *op. cit.* p.79 を参照。
- (9) Gallagher, O. R., 1957, 'Voluntary Associations in France', *Social Forces*, vol. 36, pp. 153-160
- (10) Anderson, R. T., 1957, 'The Indirect Social Structure of European Village Communities', *American Anthropologist*, vol. 64, pp. 1016-1027
—& Anderson, B. G. 1965, *Bas Stop for Paris*, New York, Double day.
- (11) Palard Jacques, 1981, 'Rapports sociaux, stratégie politique et vie associative', *Sociologie du Travail*, vol. 23, pp. 308-324
- (12) Canto J.-F., 1976, 'Panorama des Déclarations D'associations', *Recherche sociale*, n. 60
- (13) Lanfant Marie-Françoise, 1976, 'Voluntary Associations in France', *Journal of Voluntary Action Research*, vol. 5, pp. 192-207
- (14) Cabanes Robert, 1983, 'Identité du territoire limouxin', *Sociologie du Travail*, vol. 25, pp. 161-178

一、ソシアビリテとアソシアシオン——アギュロンの方法

アギュロンは社会史の研究にソシアビリテの歴史という新しい分野を切り拓いたことで知られる歴史家である。彼のアソシアシオンの研究もこの概念を基礎にしている。彼のいうソシアビリテとは、ある地域社会や社会集団に見られる人と人との結合関係(あるいは「おつきあい」の仕方)を意味する概念である⁽¹⁾。この意味でのソシアビリテは、量と質の両面から特徴づけられる。ある社会において人々の相互行為

は濃密であるかもしれないし、希薄であるかもしれない。これはソシアビリテの量的側面である。それと同時に「それは時と場所によってちがったファクションをとる」⁽²⁾。たとえば、身分上の上下関係を非常に重視するソシアビリテもあれば、同輩的な平等性を強調するソシアビリテもあるだろう。それゆえ、このようなソシアビリテの質的な相違に注目し、「フランスのソシアビリテ、啓蒙のソシアビリテ、デモクラシーのソシアビリテ」など、ソシアビリテの諸類型を論じることもできる。

ソシアビリテという言葉は用いないにしても、社会学者のあいだでは、テンニースのゲマインシャフトとゼーゼルシャフト、デュルケームの機械的連帯と有機的連帯⁽³⁾など、社会的結合関係の視点から近代と前近代の社会を類型化した例は少なくない。これらの類型は社会関係の類型であると同時に社会集団の類型でもある。社会集団はその集団内部の社会関係の特質によって特徴づけられることが多いからである。アギュロンの場合も同様、彼はソシアビリテの歴史の研究がアソシアシオンの歴史の研究と一体不可分であることを指摘する。

「アソシアシオンが人間集団におけるソシアビリテ一般の良き指標であるという観念には、ほとんど異論は生じないであろう。対人的関係が数多く、分化しているほど、より多くの集団が活動する。家族、教区、共同体、職業や年齢集団は最小の枠組みであり、それに加えて、政党、クラブや慈善団体などがある。他方、アソシアシオンが活動的になるほど、内部組織を強化しようという欲求が増大する。空き地で球遊びをする若者たちは首領や書記などの役員をもちたいとは思わない。しかし、彼らが特定の土地をもち、正規の道具を購入し、規則のある競争に参加したければ、仲間集団はビューロー(事務室)と役割分担をもつクラブにならねばなるまい。それゆえ、ソシアビリテの進歩は、一方では自発的アソシアシ

オンが増加することであり、他方では、非公式なアソシアシオンが公式化することである」。(6)

このような視点から、アギユロンは「ソシアビリテの歴史」と「アソシアシオンの歴史」を結びつけて説明しようとする。彼によると、歴史学の世界でも「アソシアシオンの歴史」は軽視されてきた研究課題である。歴史学は伝統的に、信心会 (conférence) は宗教史、政党は政治史、学会は科学史や観念の歴史、セルクルやクラブ、カフェは風俗史というように、いろいろな分野のアソシアシオンを別個に研究し、それらを統一的にとらえる視点は希薄だった。アギユロンは、このような事態を克服するためには、歴史学と社会学の共同作業が不可欠であることを強調する。ソシアビリテという、ある意味では「社会的」な一般概念を用いることによって、彼は、伝統的な狭い研究区分を突破し、「アソシアシオンの歴史」という新たな研究課題を開拓したのである。

ソシアビリテとの関連でアソシアシオンを論じることは、アソシアシオンの形成をより広い社会の制度的文脈との関係でとらえることにつながる。フリー・ライダー問題を提起したオルソン⁽⁷⁾が指摘するように、アソシアシオンは、共通の利害関係や意見の持ち主が存在するというだけでは、容易に形成されるものではない。多くの場合、人々がアソシアシオンに参加するのは、あらかじめ彼らのあいだに濃密なソシアビリテが存在し、共通の集合心性が成立しているときである。当然のことながら、このようなソシアビリテは人々の日常生活と密接に結びついた諸制度のなかで生まれる。

アギユロンは、ボディーゲルとの共著『農村のアソシアシオン』の

なかで、一八・一九世紀のフランスの農村でソシアビリテの中心となった制度として、労働の相互扶助や(かまど、粉ひき機、鍛冶場、共同洗濯場などの)労働手段の共同にもとづく諸制度、冬の夜に暖房や照明の費用の節約のために近隣の諸家族が集まる夜の集い (veillée)、一九世紀には非キリスト教化によって影響力を低下させつつあったが、それ以前の世紀には人々のソシアビリテの中心に位置した教会、この時期発展しつつあったカフェや居酒屋などの世俗的余暇の制度、若者団、地域の祭りなどをあげている。これらの社会制度を通じて人々が交流するなかで、その制度の本来の目的を越えた多くの非公式集団が生まれ、アソシアシオンの母胎となる。

私見によれば、このような視点からのアソシアシオン研究は、従来の研究に比べて、次のような利点がある。

① 公式化と非公式化

まず、それは法的アソシアシオンと事実としてのアソシアシオンとの区別が必要であることを気づかせる。既存の制度を基盤にして発生したアソシアシオンは、非公式の集団からより公式的な組織へと連続的に移行するので、公式と非公式との境界線は曖昧である。フランスでは、二〇世紀初めまでアソシアシオンが法的に規制されたことによつて、アソシアシオンの歴史の研究はアソシアシオンの法制史を主題とすることが多かった。しかし、日常生活の諸制度と結びついて発生した諸集団は、アソシアシオンとして法的に認可されないまま、非公式集団と公式組織の曖昧な境界線上で法的枠組みを越えた生命力をもっている場合がある。ソシアビリテの観点からのアソシアシオンの研究

では、このような事実としてのアソシアションに注目する必要がある。また、制度として定着したアソシアションはその内部に再び新しいアソシアションの種子となる非公式集団を生み出す。アギュロンは親しい人間のサークルから発生した学会や職業的アソシアションが公式組織として確立した後、その成員の非公式集団が親睦団体として親組織から独立していくケースをいくつか指摘している。ソシアビリテの観点からのアソシアション研究の利点の一つはこのような公式化と非公式化との動的な関係に注目できることである。

② 「伝統」と「近代」の境界

アソシアションがより大きな社会制度を基盤にして発達するという視点から、アメリカのアソシアションとフランスのアソシアションを比較してみると、法的抑圧の側面の他にもう一つ、フランスのアソシアションが歴史的に弱体であると考えられてきた理由に気づく。旧体制の時期から一九世紀にかけてフランスのアソシアションの基盤となった諸制度は、カトリック教会にしても、地域共同体にしても、前近代の枠組みとなった制度である。それゆえ、これらの制度を基盤にして成立したアソシアションは一見したところ前近代的な集団であり、近代的なアソシアションとして認知されない場合がある。しかし、たとえば、アギュロンの得意のテーマである信仰を目的とした伝統的組織が非宗教的な目的のそれに徐々に変質していく場合などを考慮すると、伝統的制度を基盤にして生まれた集団でも、それを近代化の推進にあたって克服すべき対象とのみ見なすと、その内部で成熟しつつある近代アソシアション成立の契機を見落とす危険に陥る。

この意味で、現実のアソシアションにおいては、公式と非公式の境

界と同様、「伝統性」と「近代性」との境界も曖昧である。この観点から、アソシアションの「伝統性」と「近代性」について従来よりもきめ細かな分析をおこなうことは、本稿の最も中心となる課題である。

③ 集合行動論との関連

ルフェーブルの『革命的群衆』⁽¹⁾の読者は、アギュロンのあげた農村のソシアビリテの事例が、純粹の群衆と革命的結集体とを媒介する半意識的集合体の事例としてルフェーブルが論じた事柄とびつたり重なることに気づくだろう。

ルフェーブルは、フランス革命の折り目折り目に介入し、その進展に大きな役割を果たした群衆行動を、集合体 (agrégat)、半意識的集合体 (agrégat semi-volontaire)、結集体 (rassemblement) という三つの位相でとらえた。集合体とは、電車の乗降客、学校や工場から排出される人々、雑踏など、社会関係の一時的な解体によって特徴づけられる文字通りの群衆である。ルフェーブルは、集合体では、個人は日常生活の規制から脱することによって、かえって、より広い社会に特徴的な考え方や感じ方に敏感になり、集合心性が純粹な形であらわれる場合があることを強調する。この結果、集合体では、人々の信頼する指導者が危機に瀕したり、パン屋が店を閉めたりするなどの何らかのきっかけから、メンバーの強い連帯感が一挙に噴出することがある。このとき、集合体は革命的（あるいは、反革命的）な結集体に変容する。ルフェーブルはこのような集合体と結集体とのあいだに「半意識的集合体」を位置づけた。半意識的集合体とは、集合体において潜在し、結集体において表面化する集合心性を、日常生活の中で育む社会制度と結びついた非公式集団である。

このような半意識的集合体として、ルフェーブルのあげた事例がアギユロンの農村のソシアビリテの事例と一致することは、アギユロンが制度と日常の脈絡で論じたアソシアシオンと、ルフェーブルの論じた非日常的な集合的沸騰現象である群衆とが、いずれも同じ制度のなかで生み出された共通の集合心性を反映していることを示唆している。ソシアビリテの概念（あるいは、半意識的集合体の概念）は、集合行動論と組織理論という二つの研究分野を統合するために新たな視点を提供するかもしれない。¹²⁾

④ 階級性の分析

アソシアシオンの研究は、官僚制の研究と比べて、階級性の問題が見過ごされやすい面がある。官僚制は支配関係を基調とする組織だから、原理的にその内部に利害対立と権力配分の格差を含んでいる。官僚制組織内部の成員間の関係は、全体社会の階級関係の縮図ともいえる。これに対して、共通の目的と利害に向かう人々を組織するアソシアシオンは、同一の階級に属する人々で組織されることが多い。建前上、成員の関係は平等主義的であり、成員間の緊張はエピソード的で、原理的には解決可能なものとみなされがちである。この結果、アソシアシオンの社会学的研究ではアソシアシオンを官僚制と対決する市民の自律的連帯の組織として理想化する傾向や、アソシアシオン研究を小集団研究に矮小化し、アソシアシオンの社会的機能を、個人の孤独をいやし、心理的支えを与えるという小集団一般の機能のレベルでとらえる傾向が生じやすい。

これに対して、ソシアビリテの観点はアソシアシオンの階級性の問題を考察する上でも有効である。各階級のソシアビリテはその文化を

反映する面があるからである。

周知のように、一八・一九世紀のフランス人の日常意識では、フランス社会は、貴族、ブルジョワ、民衆の三大階級に区分された。一九世紀の時点でも、この三つの階級の文化は、サロン、カフェ、居酒屋 (cabaré) というそれぞれの階級の主要なソシアビリテをメタファーにして表現されることがめずらしくなかった。¹³⁾

ユゴーは「レ・ミゼラブル」のなかで、ファンティーヌの逮捕のきっかけとなった小都市の有閑ブルジョワ、バマタボアを次のように描いている。「彼らは中性の大種類に属する。去勢者、寄食者、無能力者ともいふべきもので、少しの土地と少しの無分別と少しの機才とを持っており、サロンに出ては田舎者でありながら、居酒屋においては一かどの紳士だと自惚れている。《中略》狩猟をし、煙草をふかし、あくびをし、酒を飲み、ビリヤードをし、カフェに入り浸る。《中略》もし彼らがいくらか金持ちであれば、エレガントと言われ、もしいくらか貧乏であれば、怠け者と言われるところである。がみな単に閑人である」(14)

トクウィルは、一八四八年の憲法制定議会に普通選挙で選ばれた新しい左翼の議員を目撃した時の衝撃を語る。「私は山岳派を初めて見たように思った。それはどままでに彼らの言葉遣いや行動様式は私を驚かせたのだった。彼らは独特の言葉で話した。それは無知な人々のフランス語とも学識ある人々のフランス語とも異なっていて、両方のなかの欠陥を含んでいるものだった。というのも、それは粗野な言葉と野心的な表現をたくさん含んでいたからである。《中略》明らかにこの人物たちはサロンに属するような手合いではないが、だからといって、居酒屋に属しているとも言えない者たちだった。彼らはその習俗というものをカフェで磨きあげ、新聞小説だけを精神の糧としてきた連中である。」(15)

右の二つの引用に、バルザックの『農民』から、モンコルネ伯爵の城館、カフェ「平和」と居酒屋「大寒亭」の描写を付け加えることもできるだろう。この三つの世界では、よく飲む酒の種類（サロンのリキュール酒、カフェの香料酒、居酒屋のワイン）や遊びの種類（サロンのホイスト、カフェの玉突き、居酒屋はひたすら飲むだけ）にも相違があった。一八二〇年代のブルジョワジーは、スードリー夫人のサロンのように貴族生活を模倣する場合もあるが、カフェに見られる独自のソシアビリテをも作り上げつつあったのである。¹⁶⁾

アギュロンによると、一九世紀のセルクルはカフェと同一のブルジョワ文化圏に属している。次章で論じるように、セルクルは当時の新興ブルジョワジーの生活と文化に密着したアソシアシオンであり、セルクルの「近代性」はブルジョワ的「近代」の所産であることに、あらかじめ注意しておきたい。

注

- (1) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 7-14.
- (2) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 9
- (3) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 9
- (4) テンニース、杉之原寿一訳『アマインシヤフトとケセルシヤフト』岩波書店
Tönnies, F., 1887, *Gemeinschaft und Gesellschaft. Grundbegriffe der reinen Soziologie.*
- (5) テュルケーム、田原音和訳『社会分業論』前掲書、Durkheim, Emile, 1893, *De la division du travail sociale.*
- (6) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 12
- (7) オルソン、依田博・森脇敏雅訳『集合行為論』ミネルヴァ書房 一九八三年
Olson, M., 1968, *The Logic of Collective Action.*

(8) Agulhon, M., et Bodiguel, M *op. cit.*, 1981, p. 15-19.

(9) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 60-61

(10) Agulhon, M., *op. cit.*, 1968. の贖罪者信心会 (confrérie de pénitents) の事例、および、拙稿「民衆のアソシエーション」『現代社会学』二四号、一九八七年、八三―八八頁を参照のこと。

(11) G・ルフェーブル、二宮宏之訳『革命的群衆』創文社 一九八一年
Lefebvre, Georges, 1934, *Foules révolutionnaires*

(12) ソシアビリテの視点と集合行動論との関連については本稿では取り扱えない。とりあえず、拙稿「民衆のアソシエーション」(前掲)を参照のこと。

(13) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 79-80.

(14) 豊島与志雄訳、岩波文庫、一九八七年改版、一卷三三―三三三頁

(15) A・トクヴィル、喜安朗訳『フランス二月革命の日』タークヴィル回想録』

岩波文庫、一九八八年、一八一頁 Tocqueville, Alexis de, 1893, *Souvenirs.*

(16) 水野亮訳、『バルザック全集』第一八巻、東京創元社所収

二、ブルジョワ・セルクルの「近代性」

セルクルとは、共同で非営利的な活動をしたり、余暇を一緒に過ごすために、一九世紀のブルジョワが好んで用いた小アソシアシオンである。一七九一年のル・シャプリエ法の制定以来、フランスでは一九世紀の全体を通じて、二〇人以上のアソシアシオンは法的に規制されたことから、セルクルの成員数は二〇人未満の場合が多い(ジョッキークラブのような一九世紀後半のパリの大きなセルクルは、むしろ例外的な現象である)。セルクルは、地域によっては、一八二〇年代にも見られるが、七月王政の下で発展し、第二帝政の時期に全盛期を迎える。このアソシアシオンの形態は、単に娯楽の領域にとどまらず、当時の政治組織や経済組織のモデルにもなった。

カフェとセルクル

小林章夫はコーヒー・ハウスとクラブが一八世紀にイギリスの政治、経済、文化に果たした役割を論じている。一九世紀のフランスではカフェとセルクルが同じ役割を果たした。たしかにカフェは商業的・公開的な性格をもち、セルクルは非営利的で私的な性格をもつ。しかし、セルクルではカフェと同様に、人々はカルタや玉突きやドミノ遊びを楽しむ。当時のセルクルでは新聞を共同購入し、それをもとに議論することが活動の中心であった。セルクルに集う人々と、カフェに置かれた新聞を目当てにやってきて世間話をする人々との集まる動機には共通する面がある。

バルザックは『農民』の中で、カフェと新聞を基盤に新たな集団の形成がはじまる過程を素描している。「カフェ《平和》を振り出しに村役場の吏員全部の家を転々としてから、自由主義の主要機関紙の『立憲新聞』は一週間目にリグーの手もとへ戻ってくる。というのは名義こそカフェ店主ソカールじいさんの名になっているが、この新聞は二十人近くの人が出し合って購買しているのであった。リグーがそれを水車屋のラングリユメにまわしてやると、ラングリユメは字の読めるものには誰にでも引きちぎって分けてやるのだった。そこでこの自由主義新聞の社説と反宗教的ないかさま記事が、エーグの谷間の世論を形づくった。」(2)

互いに親しいカフェの常連集団は規約や会の名称をもたなくても一種の小クラブ、非公式のセルクルとして機能するものである。カフェの親しい仲間が母胎となって実際に公式のセルクルが作られる場合も少なくなかった。大都市の最も豊かなセルクルを除くと、自前のクラブ・ハウスを確保することはむづかしい。多くのセルクルは会合の場所としてカフェの仕切られた空間を利用した。アギュロンは、このよ

うなカフェで会合するセルクルを、カフェセルクル型のアソシエーションと呼ぶ。ここではセルクルとカフェの距離はさらに短くなる。

カフェとセルクルとの関連に関する議論の最後に両者の機能的代替性の問題に触れておきたい。アーノルド・ローズが弱体なフランスのアソシエーションの機能的代替項目の一つとして、カフェをあげたことはすでに述べた。たしかに快適なカフェの存在するところでは、セルクルの必要性は低下する面がある。アギュロンによると、一八一〇年代初頭、フランスの一部の地方では、首都以上に多くのセルクルが見られた。パリには良いカフェがあり、新聞を読み、玉突きをしたいブルジョワジーの欲求を満足させていた。また、パリには大きな自由主義派のサロンがあった。これに対して、中以下の地方都市では、カフェはみずばらしい飲み屋(auberge)にすぎず、王党派のそれを除くと、サロンもほとんどなかった。したがって、地方のブルジョワ自由主義者は二重にセルクルを作る必要があったのである。しかし、アギュロンは、このような機能的代替性以上に、両者が同じ世界に属することを重視する。カフェやセルクルや新聞は——同じくこの時期のブルジョワの溜まり場であり、集団形成の母胎であった地下酒場(caveau)や貸本屋(cabinet de lecture)などとともに——この時期のブルジョワ文化システムの基本的な構成要素といえるだろう。この文化システムを背景に、セルクルは、一九世紀のブルジョワ・アソシエーションの典型であるにとどまらず、後述するように、他の諸階級のアソシエーションのモデルにもなった。

サロンとセルクル

セルクルとカフェとが同じ世界の所産であるのに対して、セルクル

とサロンは異なる世界に属し、互いに対立するソシアビリテの類型である。

「セルクル」という言葉の変遷は、旧時代のサロンからセルクルが独立する過程を示している。旧体制の下では、《セルクル》を、今日のように英語のクラブの同義語として用いる習慣はなかった。一六六七年のアカデミー・フランセーズの辞典によると、セルクルは「王妃の周囲に控える女性たち、転じて、これらの女性たちが集まる場所（すなわち、宮廷、あるいは宮廷の一部の部屋）」を指す言葉であった。同じ辞典の革命暦七年の版では、上の意味に加えて、「会話のために特定の邸宅に集う男女の集まり」という語義が追加されている。

つまり、一世紀の間にセルクルは宮廷からサロンに移行した。しかし、それは依然として男女混交の非公式集団である。一八七八年の第七版になって、はじめて「会話し、遊び、新聞を読むために、メンバーが共同費用で賃借りした場所に集まるアンシアシオン」という語義が追加される。辞書の語義の追加に先立ち、日常の言葉生活でセルクルという言葉を公式アンシアシオンの意味で用いるようになったのは、パリでは一八三〇年代、地方では場所にもよるが、一八一〇年代のことらしい（このことはセルクルが旧時代のサロンから独立し、固有の実質をもつようになったのが——地域によるズレはあるが——ほぼこの時期であることを物語っている）。

一八三〇年頃に、貴族階級のサロンに代わって、ブルジョワジーのセルクルが諸階級のソシアビリテのモデルになる。アギュロンによると、この二つのソシアビリテの類型には、次のような互いに対立する特徴がある。

表一 サロンとセルクル⁵⁾

サ ロ ン	セル クル
伝 統 革 新	家 族 外 の 場 所
家 族 の 場 所	男 女 混 合
男 女 混 合	男 性 に よ る 独 占
道 徳 性	疑 わ し い 道 徳
非 政 治	政 治 の 危 険

以下、この章では、アギュロンの図式を参考に、セルクルに見いだされるブルジョワ・アンシアシオンの「近代性」の特質を探りたい。

i 上下関係から平等関係へ

サロンは貴族主義の原理と結びつく。ここでは、特定の主人が常に自分の費用で常連のグループをもてなす。この制度は、主人の富の存在と（互酬性の欠如による）客人の主人に対する道徳的従属を導く制度である。これと対照的に、セルクルは仲間による平等主義の制度であり、会費によって運営される。この時期、セルクルの会員を指す言葉として、*membre* 以外に *abonné*（予約購読者）という言葉がよく使われた。この呼び方はセルクルが新聞や雑誌など共同購入したことから生じたものだが、この制度のもつ契約的特徴をよく示している。

ii 男のソシアビリテ

サロンは特定の家の客間に人々が集う家族ぐるみのソシアビリテである。ここでは家がアンシアシオンの発展を妨げる。これに対して、カフェなどの公共空間を利用するセルクルは、家族から独立した諸個

人のアソシアシオンである。

アギユロンは、この「近代的個人」のソシアビリテが、実は、「男のソシアビリテ」であるということを強調する。

一九世紀はブルジョワ単婚小家族（あるいは、「近代家族」）の時代、つまり、生産と消費の分離にともない、家族が私的領域に閉塞する時代である。家族は労働の場から遠ざかっただけでなく、社交の場からも遠ざかる。この結果、女性は労働の場から排除されただけでなく、ソシアビリテからも排除された。一八三〇年頃、古きフランスの礼節という表現が女性を家庭に取り残すイギリス風のライフ・スタイルの侵入を非難するためによく用いられた。この時期、セルクルの侵入とそれに続く女性の放置と孤独を取り上げた証言は数多い。

「セルクル、クラブは毎日のように増加し、私たちが女性の社会から遠ざけている。私たちは彼女たちの優しく慎み深い親密さから逃げ出している。彼女たちは私たちの無遠慮な習慣を（おまけに、煙草という麻薬の吸引の習慣をさへ）受け入れることを強いられている。」（ヴェロン博士『パリの二ブルジョワの回想録』一八五六年（7））

サロンを主催し、娘たちに息子たちと同様に完全な教育を与えるのには豊かである必要がある。それは古いエリート貴族には可能だったが、新興のブルジョワ家族には困難である。兄弟姉妹間の知的不平等は夫婦間の知的不平等を招いた。社会的階梯をさらに下降すると、より貧しく、妻が社交界に登場せず、家事に専念するブルジョワ階層に出会う。サロンを主催する貴族の生活が「家事使用人」階級の存在を前提とするのに対して、新しいブルジョワ家族は「主婦」を生み出し

たともいえるだろう。

男中心のセルクルには男たち独特の風俗が持ち込まれる。セルクルを描いた本稿の引用文は一樣にセルクルでの喫煙の情景を記している。煙草は復古王政の時代にフランスの上流・中流社会の男たちのあいだに広がったが、女性の前で煙草を吸うことは無作法とみなされた。洗練された会話や礼儀が義務であるサロンと異なり、セルクルは、男たちだけで煙草を吸い、若い娘の噂話や競馬談議に耽ることのできる——気楽であると同時に、その分——「疑わしい道德」の場でもあった。

iii セルクルと中間文化

先に引用した文章で、トクヴィルがカフェと連ねて新聞小説に侮蔑的に言及していることに注意したい。新聞が「政治神学」を教え込んだり、学ばずに時勢に発言することを教えるという批判は、私たちがこの時期の文章で何度も出会う批判である。

「大衆カフェ (estaminet) で毎日、自分の新聞を読んでいるすべての善良なフランス人に、進歩という言葉の意味を聞いてみたまえ。彼は、蒸気機関、電気、ガスによる照明、すなわち、ローマ人の知らなかった奇跡と答えるだろう。」（ボードレール「一八五八年の万国博覧会」(8)）

「新聞と新聞を読むことの自由はこの時代の進歩的な観念を育てるセルクルを休みなく発達させるといふ利点をもっている。しかし、その代償に研究と反省を犠牲にする。書籍それ自体は無視される。人は学ばずに時勢について発言するようになる。それゆえ、意見をもつことがむつかしかった時代よりも、精神は粗野になり、鈍重になる。革命後のフランスは以前よりも精神的でなくなつたように思

われる。」(レミューザ「わが人生の回想録」一八八〇—一八一年)(9)

一九世紀前半、ブルジョワジーという言葉は中間階級という言葉と同義語であった。彼らは《真の》文化人でもないし、といって、無知でもない。サロンの私的で、閉じられた空間に広がる貴族主義の文化と異なり、ジャーナリズムにせよ、家つきのシェフからレストランに移行した美食趣味にせよ、ブルジョワ文化は、商業的文化であり、公共の場に広がる文化である。まさしくそれゆえに、ブルジョワ文化は通俗文化であり、また、通俗文化であることによって、衰退期にあった貴族階級のサロンの文化に代わり、一九世紀フランスの支配的な文化となったのである。

iv セルクルと政治

すでに述べたように、セルクルは単に娯楽のためのアソシエーションにとどまらず、社会生活の種々の領域での組織形態のモデルにもなった。その重要な例は政治的アソシエーションである。

セルクルはその性質上、閉じられた場であり、監視が困難である。人はそこで政治を話し、賭け事をし、種々の不満や異端を弄ぶ。意見の自由を認めたにもかかわらず、その集合的表現の自由を認めなかった。一九世紀体制の下では、政治はこのようなセルクル以外の場所では表現できなかった。このため、その目的が友好と気晴らしであるセルクルにも自然発生的に政治が浸透する傾向があった。親しく同じ場所が集まって新聞を読み、議論することは、革命時の政治セルクルと平時の文芸セルクルに共通する特徴である。情勢しだいでは、両者の役割が入れ替わることめずらしくなかった。

一般に政治組織はその時代のソシアビリテから組織形態を取り入れる傾向がある。王政復古期の議員集団はその指導者の邸宅に討論するために集まり、テルノー派、ピエ派、ラフィット派など、指導者の名で呼ばれた。この組織形態は当時のパリの社交界のソシアビリテ(サロン)の反映である。同じ時期、ブルジョワでも、もう少し低い階層の人々はカフェに集まり、会食しながら政治を論じた。これもまた当時のソシアビリテの反映である。

「ABCの友は芽ばえの状態にある秘密結社であった。《中略》彼らはパリの二カ所で会合した。一つは市場の近くのコラントと呼ぶ居酒屋、それからもう一つは、パンテオンの近くでサン・ミシェル広場のミューザンという小さなカフェ、これは今日なくなっている。第一の集会の場所は、労働者の出入りする所で、第二の方は学生の出入りする所だった。《中略》ABCの友のふだんの秘密会は、カフェ《ミューザン》の奥室で催された。その広間は店からかなりはなれていて、ごく長い廊下で店に通じ、窓が二つあり、グレー小路に面して秘密な梯子がついている出口が一つあった。人々はそこで煙草をふかし、酒を飲み、カルタ遊びをし、または笑い声をあげていた。ごく高い声であらゆることを語っていたが、あることは低い声で話し合っていた。壁には共和時代のフランスの古びた地図がかけられていたが、それだけでも警官の目を光らせるには十分だった。」(ユーゴー「レ・ミゼラブル」(11))

それゆえ、この時期には二段階の《政党》システム(議員集団のサロンと大衆のセルクル)が一般的だった。同じ政治の社会的風習への適応は地方にも見られる。地方における下部の政治集団もまたソシエテ、セルクル、レユニオンなどの名で呼ばれるセルクル型のアソシエーションのゆるやかな連合体以外の何物でもなかった。大規模な大衆政

党は、法によって禁止されていたし、風習上からもなかった。当時の政党は個人を組織するのではなく、地方に自然発生的に存在したセルクルを組織した。

政治的傾向からいうと、カフェやセルクルは左翼と関係する。七月王政の下での正当王朝主義と聖職者主義は、サロンから発生し、名望家、城主、司祭を通じて広がる垂直タイプの影響力の構造を基本にした。カフェやセルクルの平等主義的ソシアビリティには左翼の傾向があり、社交的サロンの垂直的ヒエラルヒーは右翼の傾向があったようである。

v セルクルと経済

セルクルは経済組織としても機能した。セルクルの初期の担い手は実業家 (*négociant*) 層であった。一八三〇年以前にも貿易都市のポルドー、リヨン、ナント、マルセーユにはいくつかの実業家のセルクルが存在した。パリの最も初期のセルクルである一八一七年設立の「商業セルクル」や、一八一九年設立の「グラモン街セルクル」も実業家たちによって作られた。この時期、自由主義、進歩への嗜好、外国人との交際と、商業とのあいだには密接な関連があった。セルクルやカフェに見られる男のソシアビリティは、単に気晴らしだけでなく、商業上の情報交換の機会も提供する。セルクルは実業家団体としても機能した。

「最も重要なセルクルはリヨン、マルセーユ、ポルドー、ナントのセルクルである。それらはこれらの都市の著名な金融家、商人からなっている」(ラルース「一九世紀大辞典」の「セルクル」の説明、一八七〇年) (12)。

注

- (1) 小林章夫「コーヒー・ハウス」駁々堂、一九八四年。
——「クラブ」駁々堂、一九八五年
- (2) 水野亮訳、前掲(一章注16) 一二七頁
- (3) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 31-32.
- (4) この段落の引用は Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 47-49 に於ける。
- (5) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 83-84, より作成。
- (6) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 52.
- (7) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 53. (Veron, Dr., 1856, *Mémoires d'une bourgeoisie de Paris*)
- (8) 『ポートル全集』人文書院、一九六三年、第四巻、九八頁。
- (9) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 78. (Rémusat, ch., DE, 1956, *Mémoires de ma vie*, Ch.-H. Pouhas, ed. Paris, Plon)
- (10) セルクルと政治に関する議論は Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 65-72 を参照。
- (11) 豊島与志雄訳、前掲(一章注14)二巻四八四頁
- (12) Agulhon, M., 1977, *op. cit.*, p. 33. (Larousse, P., 1866-1876, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*)

三、民衆セルクルの「近代性」と「伝統性」

一九世紀のブルジョワ・セルクルは、この時期の民衆の諸階級のソシアシオンのモデルにもなった。しかし、民衆アソシアシオンは、形の上ではブルジョワ・セルクルをモデルにする場合でも、その根底に民衆に固有の伝統的制度が存在していることが多い。この章では、このような民衆アソシアシオンにおける「近代性」と「伝統性」との

結合について、いくつかの事例に触れておきたい。

労働者階級のセルクル

喜安 朗^①が描いた一八三〇年代のバリの労働者階級のゴゲット (goguettes「歌う会」) にせよ、福井憲彦^②が描いた一八八〇年代のパリ十三区革命委員会の事例にせよ、一九世紀の都市労働者階級の運動組織は、多くの場合、定例会合を居酒屋やカフェでおこなうカフェーセルクル型アソシアシオンの形態をとっている。

「この時期のどの運動組織をとってもいえることであるが、常任専従体制というものはまったくない。いわばアマチュア集団であって、出席者全員の合議制のもとに原則として週一回開かれた委員会定例会合と、彼らがしばしば開いたプロバガンダ用公開集会や講演会などが、委員会としての結集の場となる。常設の本拠をもたない方が常態であったこの時代、しかし定例会合こそは存在の証であったから、その会合場所の確保は、各委員会にとつたいへん重要な問題であった。多くの場合、場所はカフェと総称されるところ、その二階とか地下、あるいは一階の奥の小部屋など、つまり一般客から少しでも隔離されたところが、組織防衛の配慮から一般に使われたが、人数が少ないときなどはカウンターで一杯やりながらお茶を濁すことになる。《中略》これらの場所は、アルコールを含む飲み物、それに軽食を提供する所であったが、そこを利用してあるなしに地区組織の場合、メンバーのなかにならず常連がいて、定例会合のあるなしにかかわらず、仕事の往き帰りや合間に、カウンターによって一杯、そして店の親父や他の常連と議論をしたりゲームをしたりという場でもあった。」福井憲彦「一八八〇年代のバリの活動家たち」(3)

周知のように、一九世紀のフランスの労働者組織は、旧体制の伝統を受け継ぐ職人組合 (compagnonnage) や互助組合 (société de

secours mutuels) の影響を残していた。カフェや居酒屋のような「公共空間」の利用はこのような同じ職業の人間によって作られた閉鎖的集団を開放化する面がある。柴田三千雄^③によると、一八四八年の革命の前夜のマルセーユの熟練職人は、世襲率の高い閉鎖的職種と外来者の多い開放的職種のいずれの場合にも強力な組織をもっていたが、ソシアビリテの性質が異なっていた。「閉鎖的」職種の職人は余暇においても、よそ者を排除し、カバノン (cabanon) と呼ばれる共同所有の海の家で家族団欒の時を過ごした。これに対して、「開放的」職種の職人はガンゲット (gangette) と呼ばれる近郊の居酒屋に集まり、他の非熟練労働者も交えて痛飲した。前者はサロンのソシアビリテに近く、後者はセルクルのそれに近い。伝統的集団へのセルクル的要素の浸透は、その集団の近代化を促進する場合が多いようである。

農民セルクル——シャンブレの事例

アギュロンによると、上層階級におけるサロンとセルクルの対立は農民社会でも再生産されている。サロンに対応するのは、本稿の第二章で触れた夜の集い (veillée) である。他方、夜の集いと最も対照的

表一 居酒屋と夜の集い^④

居	酒	屋	夜	の	集	い
全	社	会	農	民	だ	け
の	開	放	い	く	つ	か
の	世	界	地	方	的	な
酒	飲	み	小	労	働	
ど	な	り	敬	虔	な	雰
政	治	談	議	老	人	の
議			思	慮	分	別

な「男のソシアビリテ」が居酒屋であることは、いうまでもあるまい。両者には前頁表二のような互いに対立する特徴があった。

アギユロンの論じたプロヴァンス地方のシャンブレ (chambre) と呼ばれる農民セルクルは、民衆の伝統的なソシアビリテが居酒屋のソシアビリテと合体し、ブルジョワ・セルクルの機能的等価項目を作り出した興味ある事例である。⁶⁾ 一九世紀後半のプロヴァンスは農民の急進主義が顕著だったことで知られる地方である。アギユロンはこの農民急進主義の起源を探索し、シャンブレが左翼政治思想の普及の道具として大きな役割を果たしたことを見いだした。

アギユロンの作成した表三⁷⁾に見られるように、一九世紀の前半には、シャンブレ、居酒屋や、ブルジョワジーのセルクルなどの「男のソシアビリテ」のあいだには、複雑な対抗関係があり、そのそれぞれが異なる社会集団に対応していた。

旧体制の時期から、プロヴァンスの男たちには労働の場や家畜小屋、穴倉などを利用して、男だけの集まりをもつ習慣があったようである。このような集まりが慣習的な規則や入会儀礼をもつようになる過程でシャンブレが生まれた。一八三〇年頃まで、シャンブレはその道徳的な雰囲気や地域的な閉鎖性・伝統性によって、夜の集いと同じ調子を保持していた。

これに対して、同じ「男のソシアビリテ」でも、居酒屋やカフェや宿屋 (auberge) は境界人の世界である。それは、船員、駐屯部隊の兵士、フランス巡歴の職人、行人、馬方など、単身の旅行者の溜まり場、それゆえ、北フランスの文化の流入の場、自由主義イデオロギーと政治批判のシャンソンの場、卑猥な冗談の飛び交うエピキュリズムとリベルタンの場であった。さらに、居酒屋は土着住民のなかでも最

表三 「男のソシアビリテ」の対抗関係と変遷

1830~40年頃			1880~1900年		
大きな社会的凝離 ゆえに、諸社会の分化			社会的凝離の緩和 ゆえに、機能的分化		
階級	対応する場		階級	機能	対応する場
ブルジョワ	希少で村落に 一つのセルクル		混 合 傾 向	政 治 ?	少 な く な い セ ル ク ル
民 衆	多くのシャンブレ				
異 邦 人	希 少 な 居 酒 屋			一 般 的 ソシアビリテ	増 加 し た カフェー・バー

* アギユロンによると、表の右側の真ん中は、シャンブレの衰退により空白である。その伝統は他の二つの制度に分散した。

* Agulhon., M, op. cit., 1971, p. 357より引用。

も貧しく、抑圧された人々の集まる場でもあった。
また、少なくとも一八五〇年代まで、プロヴァンスではブルジョワの「セルクル」と農民の「シャンブレ」とが同じ地域に併存していた。両者はいずれも娯楽、会話、飲酒のための「男のソシアビリテ」だが、成員の補充源が異なっていた。

この状況に変化をもたらしたのは、一八四八年の革命である。プロヴァンスの農民は、自由の数カ月、公開の政治集会の場に巻き込まれる。しかし、一八四八年中頃からの弾圧の開始によって、伝統的なシャンブレが政治活動の隠れ家の役割を果たすようになる。一八五一年二月のルイ・ボナパルトのクーデタに、プロヴァンスの農民は武装蜂起を含む強力な抵抗を各地でおこなった。この蜂起に加わったとして処罰され、閉鎖された多くの「秘密結社」は政治化した農民のシャンブレ以外の何物でもなかった。

一八五〇年頃から一八八〇年頃まで、シャンブレは農民の急進主義の拠点となる。シャンブレの政治化と並行して、シャンブレのカフェや居酒屋への接近もはじまる。シャンブレはしだいに会合場所として居酒屋やカフェの密室を利用するようになり、その雰囲気と結びつく。シャンブレは「家族と徳の破壊者」として、市当局や高位聖職者の非難と警戒の的になった。

「プロヴァンスの」ヴァール県では扇動的な諸力の組織はもつと完璧だ。小都市と同様、村落でも急進分子がシャンブレに分かれている。他の連中より抜け目のないデマゴークは、部屋を賃借し、二〇の椅子と一つの机、ガンベッタカガリバルデイの肖像画を揃えている。毎夕、二〇人に急進派がやってきて、二、三時間、一緒に酒を飲み、煙草を吸い、議論をする。これがシャンブレである。大きい町(Boulogne)だと、二〇―四〇のシャンブレがある。選挙の時期には、彼らは候補者の記事を一緒に検討する。(ベズレ『赤い地方の旅』一八七三年(9))

一九世紀も末になると、ブルジョワのセルクルと民衆のシャンブレという呼び名の区別が消滅し、シャンブレもセルクルと呼ばれるようになる。階級間の社会的距離の減少によって、アソシアシオンの二重

構造を維持することはもはや困難になってきたのである。

また、その呼び名がどうであれ、シャンブレ、あるいは、セルクル型アソシアシオンの数自体が減少する。フランスの農村のモノグラフには一つの村落が△赤色派▽と△白色派▽の二つのブロックに分かれているケースを指摘するものがあるが、プロヴァンスでもこれと同様の事態が進む。村落が一つの政治的意見に統一されている場合には一つのセルクル、左右に割れている場合には二つのセルクルが通例になる。このことは地域に土着した伝統的セルクルが全国的な政党の系列に再編成されたことを意味している。

一九世紀の初頭にはプロヴァンスの伝統的制度であったシャンブレは、カフェ・居酒屋と結合して、「北からの文化」と共和主義思想の流入の拠点となり、ブルジョワ・セルクルに同化した。この過程は、プロヴァンスの地方文化がブルジョワ的・国民的文化に融合し、かつての民俗的なアイデンティティを喪失する過程でもあったのである。

注

- (1) 喜安朗「居酒屋・ゴケット・シャンソニエ」、喜安朗「パリの聖月曜日——一九世紀都市騒乱の舞台裏」平凡社、一九八二年所収。
- (2) 福井憲彦「一八八〇年代のパリの活動家たち」、福井憲彦「新しい歴史学」とは何か」日本エディタースクール出版部、一九八七年所収
- (3) 同右、二四〇―二四二頁。
- (4) 柴田三千雄「近代世界と民衆運動」岩波書店、一九八三年、三一九―三二二頁。
- (5) Agulhon, 1971, *op. cit.*, p. 351-352 より作成。なお、Mセガレーヌ、片岡幸彦監訳、『妻と夫の社会史』、新評論、一九八三年、二〇〇頁(Segaren, M.,

1980, *Mari et femme dans la société paysanne*, Paris, Flammarion)を参照する。

- (6) シャンブレに関する議論は、Agulhon, 1970, *op. cit.*, p. 445, 「1971, *op. cit.*, p. 449。」
- (7) Agulhon, 1971, *op. cit.*, p. 357.
- (8) Agulhon, 1970, *op. cit.*, p. 422, 423。
- (9) Agulhon, 1971, *op. cit.*, p. 348-349.
- (10) エドガー・モラン、宇波彰訳『プロテマの変貌—フランスのロニーニ—』法政大学出版局、一九七五年(Morin, Edgar, 1967, *Commune en France: La Métamorphose de Protemet*, Paris, Fayard) 43。

まとめ

これまでの議論の要約

この小論ではアギユロンの著作にもとづいて一九世紀フランスのセルクルを論じた。

アギユロンはソシアビリテの概念を用いて、アソシアシオンの成立をその母胎となる制度の文脈から考察した。近代アソシアシオンは自覚的な諸個人によって一から作られるのではなく、むしろ伝統的な制度を基盤にして発達する。この観点からのアソシアシオン研究では、アソシアシオンが含まれている伝統的要素と近代要素について、従来よりきめ細かな分析が必要である。

セルクルが一九世紀フランスのアソシアシオンの主流となったのは、二〇人以上のアソシアシオンに対する当時の法的規制の結果でもある。しかし、この人数の面での制約条件だけでセルクルを特徴づけると、当時のセルクルの歴史的個性を見失うことになるだろう。カフェの利

用にせよ、新聞の共同購入にせよ、この時期のセルクルは新興ブルジョワジーの築いた新しい文化とソシアビリテに結びついている。一九世紀のセルクルは一つの歴史的文化的現象であって、「小集団」一般と同視できないことに注意したい。

セルクルは、家族から独立した個人のアソシアシオンである点や契約の観念にもとづく成員間の平等主義の点で、前世紀のサロンよりも「近代的」である。しかし、この「近代性」は、男性優位、大衆消費文化への傾斜という「近代」の別の特徴も含んでいる。近年の社会史研究の進展によって西欧の近代社会に対する見方は徐々に変化しつつある。アギユロンの議論はこのような動向と軌を一にするものといえるだろう。

ブルジョワ・セルクルは、民衆アソシアシオンのモデルにもなった。プロヴァンスのシャンブレは、カフェーセルクル的要素の浸透によって、民衆の伝統的な集団が「近代化」される過程を示す事例であった。

一九世紀「近代」から二〇世紀「現代」へ

組織の世界では一九世紀「近代」と二〇世紀「現代」との断絶を意識する必要があるようである。前章の最後で述べたように、シャンブレは一九世紀の末になると、その数が減少し、全国的な政党の組織網と結びついた少数のセルクルに再編成された。これはプロヴァンス地方のシャンブレに限らず、当時のセルクルの全般についてもいえる現象である。

一九世紀の末から二〇世紀にかけて、社会生活のあらゆる領域で組織が大規模化する。一八八四年の職業団体の公認に続き、一九〇一年に結社の自由の原則が確認されたことによって、少人数のセルクルを

利用する法的な必要がなくなった。さらに、第三共和政の下での全国的な鉄道網の完成、公教育の実現、一般兵役制度の強化によって、地域的な多様性と閉鎖性が解消し、地方の諸集団を全国組織に統合する機会が増大した。一九〇一年、最初の全国政党である急進進社会党 (Parti radical et radical-socialiste) が結成、一九〇二年には二つの社会党 (Parti socialiste français, Parti socialiste de France) が結成される (一九〇五年合併)。議員と地方の活動家が単一の組織に結合した。同様に、労働組合、経営者団体、農業組合 (Syndicat agricole) など、いずれもこの時期に全国組織を作りあげた。

大規模化したアソシアションでは、成員の合議による意思決定や平等の確保は困難になる。セルクルに代わって、官僚制がアソシアションのモデルになる。アソシアションの内部にヒエラルヒーが作られ、熱心な活動家と名目会員とのあいだに溝ができあがる。ミヘルス¹⁾が寡頭制の鉄則を唱えたのも、この時期のヨーロッパの諸政党の観察にもとづくものであった。

セルクルは巨大な全国組織の細胞器官に転落する。あるいは、狩猟、音楽、スポーツなどの特定の趣味に目的を特定化する。一九世紀には社会生活の諸領域のアソシアションのモデルであったセルクルは、もはや周辺の存在になる。

残された課題

一九世紀から二〇世紀にかけてのアソシアションの変遷が以上のようなものであったとすると、本稿の残された課題の一つは、一九世紀のセルクルに見られた「近代性」(例えば、男のソシアビリテ)がアソシアションの「大衆組織」化にもなっていないという変容をとげたの

かということである。

このような問題を考える上でも、ソシアビリテの視点は有意義である。アギュロンは一九世紀のアソシアションの成立に寄与したソシアビリテの基盤として、カフェや居酒屋などの世俗的な余暇の制度に注目した。二〇世紀のアソシアションを論じる際には、工場や学校、軍隊などの諸制度に発生した新しいソシアビリテの問題にも注意する必要があるだろう。

第三共和政の下でフランスの農村では、学校の周囲や同期の兵士のあいだに新しいタイプのアソシアションが発達する (世俗教育の支援の会や成人学級、青少年のクラブ、戦友会²⁾ (Oggs など)。農業組合は金融や農地の整理、農業生産の改良など、農民生活の基幹となる部分に新しいアソシアションを作り出した。第一次世界大戦の経験もまた組織化の新たな契機になる。プロス³⁾によると、第一次世界大戦の戦友によって作られたアソシアションは両大戦間の農民のソシアビリテの中心となった。

このような新しいアソシアションを支える制度はいずれもその背後に全国的な組織をもっている。また、その活動家も政党やカトリック系の全国組織に所属している場合が多い。教会、国家、自治体、企業などの巨大組織は、リーダーや資金の提供を通じて、地域社会の諸アソシアションを自己の勢力下に統合する。本稿の「はじめに」で引用したランファンの調査でも、彼女の調査した都市のアソシアションの七割以上が何らかの形で全国的な組織に系列化されていた。このようなアソシアション間のネットワークの形成の過程の分析もこの時期のアソシアションの研究では重要な課題である。

以上、今後の研究課題として、一九世紀から二〇世紀にかけてのア

ソシアシオンの変容にかかわる問題を指摘した。これ以外にも論じ残した点がある。筆者はアギュロンのソシアビリテの方法の利点の一つとして集合行動論との関連を指摘したが、本稿では直接この問題に触れる機会はなかった。

サロンからセルクルへの変遷が男女混合のソシアビリテから男のソシアビリテへの移行であったことはすでに述べた。これと同様のことが当時の民衆行動についてもいえる。一九世紀の前半まで、民衆の集合的な抗議の形態は男女と子供の交じった暴動であった。一九世紀の後半になると、男子の普通選挙権や組合 (syndicat) にもとづく運動が民衆行動の中心になるが、これらはいずれも男主体の運動である。本稿では触れる機会がなかったが、アギュロンのシャンブレの研究はこのような民衆行動の過渡期におけるシャンブレの役割についても興味深い指摘が多い。この時期のプロヴァンスの農民のソシアビリテと文化、政治意識と運動のいずれにも見られる「近代的」な要素と「伝統的」な要素との結合は、当時のこの地方の民衆行動に多様な色合いを与えている。これについては近い将来に別稿を準備したい。

注

- (1) ミヘルス、森博・樋口展子訳「現代民主主義における政党の社会学——集団活動の寡頭制的傾向についての研究」木鐸社、一九七三年 Michels, Robert, 1911, *Zur Soziologie des Parteiwesens in modernen Demokratie: Untersuchungen über die Oligarchischen Tendenzen Gruppenlebens.*
- (2) この段落の記述は Agulhon, M., et Bodiguel, M., 1981, *op. cit.*, p. 25-26 を参考にした。
- (3) Prost, A., 1977, *Les anciens combattants dans la société française*, 3 vols.